

第52回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

東京都知事賞：

「はな子のいる風景

イメージを（ひっ）くりかえす」

装幀者：尾中 俊介氏（Calamari Inc.）

東京都知事賞

『はな子のいる風景 イメージを（ひっ）くりかえす』

出版社／武蔵野市立吉祥寺美術館
装幀者／尾中俊介（Calamari Inc.）
印刷会社／大村印刷株式会社
製本会社／大村印刷株式会社
貼込・差込／
（社）武蔵野ワークセンターけやき



●御社の活動について教えてください。

美術関連の印刷物や書籍のデザインを主に手がけています。近年の仕事に『モダンアート再訪』（埼玉県立近代美術館 | 2018）、「田村友一郎 | 服部浩之『試論：栄光と終末、もしくはその週末/Week End』」（小山市立車屋美術館 | 2017）、『マーティン・グリード』『アリン・ルンジャー』『モンクット』（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）、『コレクション展1 PLAY/栗津潔、マクリヒロゲル4』（金沢21世紀美術館 | 2017）、『Week End / End Game』（田村友一郎著 | 小山市立車屋美術館 | 2018）、『はな子のいる風景 イメージを（ひっ）くりかえす』（AHA!編 | 武蔵野市立吉祥寺美術館 | 2017）『言葉の宇宙船』（芹沢高志 + 港千尋著 | ABI + P3 | 2016）などがあります。詩人としても活動し、詩集『CUL-DE-SAC』は第15回中原中也賞の最終候補となりました。また、パブリッシング・レーベルの「pub」を主宰し、これまでに三冊の書籍を企画・デザイン・出版しています。

●今回の造本（写真を張り付け、ひっくり返した裏面にもある仕掛けや等）の意図を教えてください。

企画の松本篤さんとの最初の打ち合わせ時には、すでに写真を印刷で再現し貼り付けという案が立ち上がりました。写真の積み重ねがはな子の69年間そのものになるというアイデアです。集められた約550枚の写真すべてを貼り付け、それによって小口側が大きく膨らむことで、象のような存在感を出すという狙いもありましたが、そもそも「スクラップ」という一般的な行為には、写真の持つ喚起力を最大限促す可能性があることを見出したことに端を発します。最終的には、予算・時間・物理的に約550枚すべての写真を貼り付けることは無理だとわかり、選抜した写真をすべて同サイズにしたモノクロの写真に約30枚の写真を貼り付ける今の形となりました。貼り付けた写真裏面の様々な仕掛けやアンケートを掲載した小冊子、関連資料の差し込みは、見るたび、読むたびにイメージが変容していく本であることの重要な要素です。松本さんは「人」と「象」の間に横たわる溝（モート）に問題を見出していました。つまり、「像＝イメージ」はけっして固定されないのです。

●受賞の知らせを聞いた時の感想はいかがでしたか？

今回のプロジェクトの参考とした本の中にクリスチャン・ホルストの「フェロー・トラベラーズ」という書籍がありました。作家が収集した写真を忠実に再現し箱におさめたものです。この本をデザイン・出版したedition. nordの秋山伸さんが審査員をされていると知り、秋山さんならどう捉えてくださるか気にもなり応募しました。私たちは当初から箱に収めることをせず、背を固めて時系列に並べることを選択しましたが、秋山さんの未編集の態度は参考になっています。受賞の知らせを受け、制作に関わった全ての方々に嬉しい報告ができ嬉しくおもいました。

●今回の作品制作で、こだわった点や苦労した点は？

「はな子」というかつては生きていた存在を、イメージとして固定させないためにも、この本には写真とテキストを何度も読み繰り返す機能が必要でしたが、写真とテキストが時系列にただ並んでいるだけでは不自由なことは明らかでした。そこで読者をコントロールするのではなく自然に繰り返し読むことを促すための仕掛けが必要だと考え、編集を二段階行なっています。まず一段階では、はな子が生まれてから亡くなるまでの写真を選び、飼育日誌とともに並べたモノクロの写真集をつくるというパブリックな編集。そして二段階目では、その本にパリンプセストやスクラップブックのような行為によってはな子とのプライベートな関係性を見出していく編集をしました。たとえば表紙に施したシルバー印刷された文字や校正の痕跡、見せ消し、表4の写真の貼り付けなどは、一度製本されたものに足されているかのようにみせるためです。あくまでもそういう体で編集している点では「強い編集」と言えますが、こうすることで編集者やデザイナーの作家性が薄れ、硬い印象がなくなり、読者が没入しやすくなったと思います。

●紙の本について

情報を伝えるためだけであれば紙の本より電子の方がよいかもしれませんが、物質としての本でなければ伝わらない内容はあるのではないのでしょうか。私たちには身体があり感覚があり、また、一生という限られた時間と人の数だけ異なる経験があります。つまり、私たちが脳だけの存在にならない限り、身体性を放棄しない限り、紙の本には尽くせぬ可能性があると思います。（了）